

西光寺だより

第二六二号 令和六年 一月一日発行

新年あけましておめでと〜ございませう。

本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

二〇二四年、新しい年がはじまりました。

元旦は比較的暖かく過ごしやすい日でありました。

毎年のことではありますが、あたりまえに元旦会を迎えられることに特別な思いで手を合わさせていただきました。変わらぬ見守って下さる阿弥陀さまへの感謝を、皆さんと共に手を合わさせていただきました。

さて、以前から申していることではありません、

2月28日(水曜日)、生涯学習センター きらめきホールにて、

茨木東組 親鸞聖人御誕生八五〇年 立教開宗八百年慶讃法要

を、厳修致します。午後二時から開演で、入場無料であります。

茨木東組17カ寺の寺院が一同に会しお勤め、そしてご法話を聴聞し、女性だけのミュージカル劇団である、劇団音芽(おとめ)による親鸞聖人のご生涯をミュージカルでお送りいたします。

親鸞聖人がおられたからこそ、こうして皆さまとお出会いするができました。浄土真宗のみ教えは私たちのご縁をも繋いでいただいています。そんな思いで皆さまご参加いただけたら嬉しく思うことでもあります。

参加のお返事は、西光寺か、お逮夜の際に伝えていただけるとありがたいと思います。よろしくお願ひ致します。

本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

合掌

● 今月のことば ●

ともかくも あなた任せの 年の暮れ

ある年の暮れに詠まれた、深い悲しみと、深い喜びが入り混じる俳句です。

この年の元旦には、小林一茶はこのような俳句を詠んでいました。

這(は)へ笑へ 二つになるぞ けさからは

当時は数え年。お正月を迎えるとみんなそろって一つ年をとります。前の年の五月に生まれてきた愛娘の『さと』に、「今朝からは、二歳になるんだよ。」と呼びかける幸せいっぱいの俳句です。お夕事のおつとめをしようとお仏壇にろうそくを灯して、おりんを鳴らすとぷっくりとした小さな手を合わせて「なんむ、なんむ」と称える、しおらしく殊勝な様子が、眼に浮かぶようであります。

六月、そのさとちゃんが、「天然痘」という恐ろしい疫病にかかり高熱が出て、顔や手足に発疹ができ、水ぶくれが膿んで、つらく苦しんでいます。そのかさぶたが取れて、「よかった」と思ったのも束の間、次第に弱り、静かに息を引き取ったのです。

その年に詠まれたのが冒頭の句でした。

この句は、おそらく「阿弥陀さまと一茶の対話」を歌ったものだろうと思います。一茶は、浄土真宗のご門徒であります。浄土真宗を開かれた親鸞聖人は、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えるお念仏は私が阿弥陀さまのことを呼びする声と同時に、阿弥陀さまが私に呼びかけてくださっている声でもあるんだよ」と教えてくださいます。

「一茶よ。あなたは一人じゃない。私が、あなたを生涯、抱き続けているよ。もうそんな苦しい思いは、させはしない。いつどのような形で命の終わりを迎えようと、一切の苦しみのない安らかな悟りの世界、お浄土に、私が抱きとる、私が生まれさせるから、安心して、私に身を任せなさい」

「はい。阿弥陀さま。さとも、私も、命の行き先、あなたさまに任せたいします。私の人生も、あつという間の暮れゆく時がやって参ります。だけど、死んで終わりではないのですね。さとを、苦しみのない、安らかなお浄土に抱きとつてくださって、有り難うございました。さとが待っているお浄土に、私も生まれさせていただけること、さととまた会えること、本当に有り難く。嬉しく存じます…」

年末の夕暮れ、お仏壇のろうそくが灯され、おりんが鳴り、一茶のお念仏の声だけが静かに響いています。阿弥陀さまを見つめて、お念仏を称え、お念仏を聞きながら、悲しみと喜びの涙があふれてきた一茶。その胸の奥では、このような対話がなされていたのではないかと
思うことであります。
(大谷本廟 若林唯人)

◆先月の報告◆

①十二月五日(月) 六日(火) 京都西本願寺にて念仏奉仕団に参加してまいりました。今回は30人で参加いたしました。西光寺からは3人でありました。本願寺での貴重なお時間を共に過ごさせていただきました。ありがとうございました。



②十二月三十一日(土) 西光寺鐘楼にて除夜の鐘を行いました。一年を振り返りながらそして、新たな年を迎えるという気持ちで打たせていただいたことでもあります。

小雨の降る中ではありましたが、ご縁のある方、近隣の方々に来ていただき、本堂で静かに手を合わせたことでもあります。
ありがとうございました。

